近隣とのつきあいと視線によるプライバシーの被害意識の関係

—転居地毎の居住経験のインタビュー—

THE RELATION BETWEEN THE ASSOCIATION WITH NEIGHBOURS
AND THE CONSCIOUSNESS OF PRIVACY

—Interview on the experience at each habitation where one has lived—

吉田 哲*¹, 宗本 順三*²

Tetsu YOSHIDA and Junzo MUNEMOTO

In this study, from interview on 8 person (1~2 hour for each), we tried to clarify following. "When people have no association with their neighbour, people has consciousness of their privacy by being seen from those who live in the houses of facing each other" well presents the situation that the consciousness of privacy occurs, but this is the rare case in the residents. And we find the following is more suitable for the relation between association with neighbours and the consciousness of privacy. "Even when people have no association with their neighbour, the consciousness doesn't occur."

Keywords: built-up area, apartment house, privacy, sight line, association

既成市街地、集合住宅、プライバシー、視線、つきあい

1. 研究の背景・目的

地縁に基づく近隣のつきあいが旧来からある市街地では、庭や街路等を挟んで対面する家までの距離が短い場合でも、その家の方を見ない（聞かない）ようにする遠慮や、実際には見えて（聞こえて）いるものをあたかも見えて（聞こえて）いないものとするなどして、近隣集団内における構成員相互のプライバシーを「形式的に」であれ、守られているものとする不文律的な合意があると考えられる。しかし、既成市街地が更新されていく場合、新しく建設される（集合）住宅に入居する居住者は必ずしも、積極的にその土地に旧来からある地縁に基づく近隣社会の構成員になるとは限らない。社縁など地縁以外の関係でのつきあいが中心になるにつれ、家が隣合うだけの他人同士という関係が生じることも多くなり、上述した不文律的な合意は成立しづらくなっていくと考えられる。

近隣とのつきあいと視線によるプライバシーの被害意識の関係について、小林他は、「集合住宅における共有領域に関する研究—その1. 共有領域の構造」^{文獻1)}で、住戸の窓の外に直接続く接地空間である共有領域での生活行動が多いほど、あいさつをするなどの近隣交際数が多くなることを明らかにした。さらに、近隣での交際が多くなると、共有領域の所有意識が高まるため、他者の接近が回避さ

れることによって居住者のプライバシーは確保され、住戸の窓などの開放性を担保できることを示唆した（…①^{注1)}）。この中で、居住者のプライバシーを侵害するのは、共有領域へやってくる他者の視線が主であった。対面する住戸の居住者から見られることによってプライバシーが侵害されるかどうかについては、「対向住戸と交際がある場合はそこからの視線侵害を気にしなくなる傾向が認められる」としている。

また、小林の「住居集合における共有領域の形成に関する研究」^{文獻2)}では、「共有領域が形成されることは2つの側面から住戸のプライバシーの確保に寄与する。…ひとつは、集団の凝集性の高まりによるプライバシー要求レベルの低下を通じてである（p.225）」とされ、共有領域が形成されると、その内部で近隣のつきあいのある住戸群では、窓を開放的にしても相互にプライバシーの被害意識は生じないであろうという関係が提示されている。「視線侵害意識」と「レースカーテン」の「開閉の状況」との関係からは、主にその室の室名との関係で議論が展開され、「日中の主要居室においてプライバシーの侵害が顕在化しやすい」と結論が導かれている（p.165）。

近隣とのつきあいについては、住戸群の集団の中での「顔見知り度」を設定して、「交際関係が生ずる（集団の中の顔見知り度が高い）

*¹ 京都大学大学院 助手・工修*² 京都大学大学院 教授・工博Instructor, Graduate School of Engineering, Kyoto University, M. Eng.
Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto University, Dr. Eng.

ことによってプライバシーの要求レベルが低下し、視線侵害にそれほど過敏にならなくなるという関係、また逆に、視線侵害の緩和は開放的生活を誘導し、近隣交際を強化するという直接的相補関係があると推察される (p.179)」ことを述べている。

上記では、近隣のつきあいがいない場合に視線によるプライバシーの被害意識が生じるかどうか、つまり、「近隣とのつきあいのない場合は住戸の窓の開放性は担保されず、プライバシーの被害意識が生じる」…②とは言及されていない。前頁で挙げた①を「近隣のつきあいがある場合には、住戸の窓の開放性が担保され、プライバシーの被害意識は生じない」とすると、論理学で言う「裏(命題「AであればB」)に対して「AでないならBでない」)として、②の「真偽」はどう考えればよいのだろうか。近隣のつきあいがなければ、住戸の窓はカーテンなどを閉じがちになり、また、プライバシーの被害意識は生じがちになると言えるのであろうか。

既成市街地で集合住宅が建設される場合、周囲に既に住む住宅との間に建物が近い距離で隣接するという理由だけで、地縁に基づく近隣のつきあいが生じるとは考えがたい。理想的には近隣社会の中で、①のように、近隣とのつきあいが生じて、住戸の窓の開放性が担保され、プライバシーの被害意識が生じないのであればよいのであるが、「集団の凝集性の高まりによるプライバシー要求レベルの低下」を望めるのは、居住期間の長い居住者達の間で、近隣のつきあいがあり、相互の関係が成熟した場合など限定がつくのではないかと考えられる。また、近隣のつきあいがいない場合でも、プライバシーの被害意識が必ず生じているわけではないことを①を強調する際には見落としがちである。そこで、②に対しての反証命題を「近隣とのつきあいのない場合でも、住戸の窓の開放性が担保され、プライバシーの被害意識が生じない」…③と設定すれば、近隣のつきあいがなく、相互の関係の成熟しない場合でも、居住者のプライバシーの被害意識が生じていないことを、うまく説明することにつながるのではないかと考える。以上のように本論では、反証命題を裏付ける事例を、インタビューを通じて得た資料の中から抽出し、近隣とのつきあいと視線によるプライバシーの被害意識(以下被害意識)との関係に着目して整理した上で示すことによって、②の「真偽」を確かめることを目的とする。

被害意識が、どのような種類の市街地や住宅、もしくは居住者の年齢や家族構成の段階で生じるものであるのかについて、小林は「住居集合における共有領域の形成に関する研究」(文献2)のp.268で、居住者のプライバシーの意識と傾向が居住地によって異なるとして、居住者のパーソナリティを5類型にわけて、各パーソナリティが典型的に見られる住宅地のイメージを仮説的に提示している。被害意識が、どのような種類の市街地や住宅、もしくは居住者の年齢や家族構成の段階で生じるものであるのか、また、被害意識が「見られる」という事実に基づいたものであるかなど否かを明らかにすることは被害意識の発生をとらえる上で重要であると考えられる。

宮代他の「住宅の居間における窓格子の心理的效果に関する研究」(文献3)や、友田の「住居集合計画手法に関する領域的考察—住居集合における開放性に関する環境心理的原理」(文献4)では、「対面する住戸の居住者から見られる」ことを、「窓=目」に擬する発想によって分析を行っている。保坂は「空間の演出 窓 デザインポキャブラリーとしての展開」(文献5)で「窓はよく目と比べられる」と

指摘しており、「窓を目に擬するという発想」を基本に据えた研究も多い。拙稿の「窓の対面環境による視線の感受意識とプライバシーの被害意識の相違—木質アパート建替集合住宅を事例として」(文献6)もこれに属する研究である。しかし、「窓を目に擬する」ことは、「対面する住戸の居住者から見られるかどうか」を「モデル化」したものであり、「見られたかどうか」という事実を示すものではない。宮代他が「居住空間における視覚的プライバシーに関する研究」(文献7)で「窓を目に擬する」という比喩とその住戸にいる人から見られるという事実の違いを区別していたように、その区別は重要である。

また、本論でつきあいとしたのは、挨拶を交わす程度関係ではなく、話をすることのあるような関係とした。また、窓の外に接地空間である共有領域がない場合、つまり、非接地階の住戸で窓の外が中空であるような場合、隣り合う住戸間などで行われるつきあいが、「窓のすぐ外に見える共有領域」で行われることはない。戸建住戸同士で双方の庭同士が隣接する場合などでも同様である。対面する住戸群の窓から見られることによるプライバシー意識と近隣のつきあいの関係を考える場合には、「窓のすぐ外に見える共有領域で行われる行動をともなった近隣交際」という、つきあいが行われる場所などの限定を外し、「近隣とのつきあい」があるかどうかのように、一段抽象的なものとならざるを得ない。

2. 研究の方法

本論では図1に挙げる集合住宅(注2)の居住者を対象に、協力の得られた8世帯に、これまでの転居地毎の居住環境、つきあい、プライバシーなどについて覚えている分だけ自由に語ってもらう主旨のインタビューをおこなった。インタビューの回答者(以下回答者)の選出には、現在居住している住宅までの転居の経験が多くなり、かつ、様々な年齢の時期を別の場所で生活し、各時期の経験の比較が可能な高齢者が中心となるように配慮した。インタビューの中では特に、つきあいと視線によるプライバシーの被害意識について語られた内容を中心に整理した。定型的な回答形式のアンケートでは得られない質的な事柄、例えば、どのような周辺環境やつきあいの時に被害意識をもつか、また、視線によるプライバシーの被害意識が生じている場合、それが「見られる」という事実に基づいたものであるか否かなどの判断を確かなものにするためインタビューの形式をとった。また、現在の居住地への転入居から6ヶ月までの、1、3、6ヶ月時に回答を得た留置自記式のアンケートにおける被害意識について(近くの家・住戸からの視線を「感じるか・否か」に3段階(感じる(=感受意識がある)/どちらでもない/感じない)で、「気になるか・否か」に3段階(気になる(=被害意識がある)/どちら

図1 調査対象住宅の敷地周辺図 (1:5000)

でもない／気にならない))に、上記の8世帯が回答した部分と、さらに、補足的に上記のアンケート（以下、注2に挙げるアンケートを「アンケート」と呼ぶ）の際、自由記入として上記8世帯以外が回答したものも参考として用いた。

回答者の年齢、転居の主な理由、また、感受意識、被害意識の1、3、6ヶ月時の両回答の組合せの型などをまとめたものを表1に示す。70歳前後で退職後の夫婦のみとなった高齢者が中心となり、転居回数の多い世帯が半数となった。高齢者は、現居住地までの居住履歴のうち、戸建住宅の多い住宅地につきあいのあった人とのつきあいが転居以降のつきあいの中心になっている場合が多かった。

被害意識の回答を見ると、現住宅に入居後のいずれかの時期に被害意識があると回答した回答者は、以前に文化住宅などのアパートに居住したことのある居住者（G氏、H氏）であった。高密度住宅市街地と考えられる場所で居住したことのあることが、必ずしもどこへ居住しても視線によるプライバシーの被害意識の軽減につながるわけではないことがわかる。転居回数が多いこと（表2、4頁参照）も、必ずしもどのような環境に対しても転居当初から全く抵抗なくその居住環境へ馴染むことにつながるわけではないこともわかる。

表1 インタビュー回答者の被害意識と転居の理由など

	年齢層	性別	視線感受・被害意識の型			転居の主な理由	居住したことのある住宅の形式
			1ヶ月時	3ヶ月時	6ヶ月時		
A氏	60歳代	女	1	1	1	疎開、夫の転勤	7戸建、7戸建、戸建
B氏	70歳代	男	1	1	1	転 勤	長屋、7戸建、戸建
C氏	70歳代	男	1	1	1	転 勤	7戸建、戸建
D氏	30歳代	女	1	mis	1	仕事に便利な所へ	7戸建、戸建
E氏	70歳代	男	1	4	3		7戸建、戸建
F氏	60歳代	男	2	1	1	転 勤	7戸建、7戸建、戸建
G氏	60歳代	女	2	3	1		7戸建、7戸建、戸建
H氏	30歳代	女	mis	2	2	震災ほか	7戸建、7戸建、戸建

視線感受・被害意識の型：

現在の住宅で「近くの家・住戸からの視線を」

1:感じない、気にならない 2:感じる、 気になる

3:感じる、 気にならない 4:感じない、気になる mis:回答に不備

図2 回答者に見せた住宅種類の写真

3. インタビューの概要

回答者となったのは、C、D棟で協力の得られた8世帯である。各世帯あたり1～2時間、各世帯の住戸を調査員が訪れるかたちでおこなった。同居の配偶者などがある場合、インタビューに際しては都合のつく限り同席してもらい、記憶の助けとなる会話は妨げないようにした。手順としては、事前に行った「アンケート」の中で得られた居住したことのある住宅の類型などから、図2のように用意した写真を手がかりに、転居した居住地毎の

(1)居住環境や住宅の形式など

(2)つきあいの状態(主とするつきあいを中心に。近隣とは限定せず)

(3)プライバシーの被害意識などが生じていたか(窓同士の対面によるものにふれる発言が、できるかぎり得られるよう尋ねた)

(4)最も愛着を感じた／印象に残っている居住地、その理由

を中心に調査員の用意した写真を参考に可能な限り思い出してもらい自由に語ってもらった。これを回答者の了承を得てテープレコーダーに記録し、ワープロを用いて逐語で文書ファイルとしたものを1次資料とした。これをもとに各回答者毎に表2(4頁)のような居住履歴表を作成した(論文に挙げたものは居住地の地名を割愛)。どの居住地について述べたものであるかについては適宜確認した。各居住地について言及される量には、ばらつきがあった(意図的に回答者自身が語ろうとしない居住地にはそのままふれないものとした)。以降では、特に(2)、(3)について特に言及のあったところについて再度整理した(表2中、網掛)。その上で文書ファイルの内容のうち、調査員及び回答者の相槌や確認、調査員の質問の言葉などの部分を割愛し、回答者の語る部分のみを各居住地毎につなげた。

表2 回答者の居住履歴

A氏	年齢	周囲の環境	自宅写真	階数	所有	住宅形式など	同居家族人数	左記中の	つきあいを端的に
1	-17歳	都市近郊、隣分田舎	1	---	持家	戸建、借家5軒経営	5人+従業員	三女	---
2	-23歳	城下町のはずれ農家	1	---	農家の離れ	農家の農家	母+三姉妹	三女	同居親戚と
3	-27歳	写真5、ごちゃごちゃ	7	2階建	民営借家	アパート	単身	---	近居の親戚と
4	-29歳	写真4、駅側は写真5	5	2階建	民営借家	戸建、しもたや	夫婦	妻	---
5	-33歳	写真2	11	3階建	社宅	フラット(2階居住)	3人	母	社内でにつきあい
6	-39歳	写真6、戦前簡易耐平	11	3階建	社宅	フラット(2階居住)	4人	---	社内でのつきあい
7	-45歳	写真3、割と静かな	3	---	借上社宅	戸建	"	"	近隣と良好な
8	-47歳	大学敷地内、住宅街	3	---	借上社宅	戸建	"	"	---
9	-72歳	写真3、造成地分譲	3	---	持家	戸建	4人+両親	"	近隣と良好な
10	-73歳	---	---	6階建	公団賃貸	フラット(2階居住)	夫婦+母	"	子供世帯と
B氏	年齢	周囲の環境	自宅写真	階数	所有	住宅形式など	家族人数	左記中の	つきあいを端的に
1	-20歳	下町の密集住宅街	6	2階建	民営借家	長屋	3人	長男	---
2	-22歳	住宅街の中、点々	---	---	"	下宿(間借)数カ所	単身	---	---
3	-24歳	---	1	---	農家の離れ	戸建	夫婦	夫	---
4	-25歳	大宮通に面す	5	2階建	民営借家	戸建(古町家/商店)	3人	長男	---
5	-30歳	下町の密集住宅街	5	"	"	長屋(古町家)	夫婦+両親	夫	---
6	-50歳	JR線路脇、駅側	3	---	持家	戸建	4人+両親	"	近隣と良好な
7	-52歳	市内まちなか	---	---	借上	戸建	単身	---	---
8	---	屋敷町、駅側	10	---	持家	フラット	4人	夫	---
9	-70歳	屋敷町、駅側	10	---	持家	フラット	3人	"	---
10	-74歳	JR線路脇	10	11階建	持家	フラット(11階居住)	夫婦	"	孤立
11	-75歳	---	---	6階建	公団賃貸	フラット(3階居住)	"	"	近隣つきあいない
C氏	年齢	周囲の環境	自宅写真	階数	所有	住宅形式など	家族人数	左記中の	つきあいを端的に
1	-22歳	屋敷町	4	---	持家	戸建	7人	末子	---
2	-54歳	屋敷町の戸建住宅転々	4	---	社宅	戸建、最後8室120坪	4人	父	社縁=近隣、趣味による縁
3	-61歳	屋敷町	4	---	借上	戸建	3人	"	---
4	-67歳	ビジ街だが下町的	10	---	持家	フラット	夫婦	夫	近隣つきあいない
5	-72歳	公団郊外団地	12	---	公団賃貸	フラット	"	"	近隣つきあいない
6	-73歳	---	---	6階建	公団賃貸	フラット(6階居住)	"	"	近隣つきあいない
D氏	年齢	周囲の環境	自宅写真	階数	所有	住宅形式など	家族人数	左記中の	つきあいを端的に
1	-27歳	屋敷町、駅側(徒歩5分)	4	---	持家	屋敷(離れ、下宿)	4人+手伝	長女	近隣の通判干涉
2	-31歳	駅側(徒歩2分) 田舎	---	3階建	持家	タワーマンション	3人	長女	近隣つきあいない
3	-39歳	駅側(徒歩1分)	9	6階建	民営借家	ワルマンマンション(6階居住)	単身	---	---
4	-40歳	---	---	6階建	公団賃貸	フラット(6階居住)	単身	---	近隣つきあいない
E氏	年齢	周囲の環境	自宅写真	階数	所有	住宅形式など	家族人数	左記中の	つきあいを端的に
1	-24歳	在所、農家、写真1	1	平屋	持家	農家の農家	5人+兄弟	末男	---
2	-32歳	"	1	"	上記の離れ	"	夫婦	夫	---
3	-39歳	---	11	4階建	公団賃貸	フラット(3階居住)	"	"	隣の住戸と今も続く
4	-71歳	写真2、駅2分	11	"	公団分譲	フラット(4階居住)	"	"	隣の住戸と今も続く
5	-72歳	---	---	6階建	公団賃貸	フラット(3階居住)	"	"	近隣つきあいない
F氏	年齢	周囲の環境	自宅写真	階数	所有	住宅形式など	家族人数	左記中の	つきあいを端的に
1	-5歳	記憶なし	---	記憶なし	---	---	5人	長男	---
2	-12歳	屋敷町	4	---	民営借家	戸建	"	"	---
3	-14歳	市内まちなか	8	---	"	戸建、しもたや	母子4人	"	---
4	-18歳	屋敷町	4	平屋	公務員宿舍	戸建、もともとの借家	5人	"	---
5	-19歳	官庁街、官庁宿舍街	3	"	"	戸建	"	"	---
6	-21歳	"	"	"	"	"	"	"	---
7	わずか	市内まちなか	5	---	社宅	戸建、単身寮	単身	---	---
8	わずか	田んぼの中	2	2階建	"	フラット	"	---	---
9	-25歳	写真4	11	3階建	"	"	"	---	---
10	-26歳	田んぼの中	2	2階建	"	"	夫婦	夫	---
11	-28歳	屋敷町	4	---	"	旧屋敷、7世帯共同	"	"	広い1住戸内で社縁
12	-30歳	造成中住宅地	8	---	"	3連住戸	3人	父	---
13	-34歳	写真4	11	3階建	"	フラット	4人	"	社内でのつきあい
14	---	川のそば	2	---	"	戸建	"	"	---
15	わずか	"	7	2階建	民営借家	アパート	"	"	---
16	-38歳	"	2	---	社宅	戸建	"	"	---
17	---	線路際、駅近	11	5階建	"	フラット	"	"	社内でのつきあい
18	-40歳	埋立地	---	14階建	持家	大団地(8階居住)	"	"	近隣つきあいない
19	---	写真3	7	2階建	社宅	フラット	"	"	---
20	わずか	"	"	"	会社借上	"	"	"	---
21	-43歳	"	"	"	社宅	"	"	"	---
22	-49歳	埋立地	---	14階建	持家	大団地(8階居住)	"	"	近隣つきあいない
23	わずか	公園のそば	11	5階建	社宅	フラット	"	"	社内でのつきあい
24	-61歳	高速路、丘陵造成	3	---	持家	戸建	夫婦	夫	近隣+歴史サクル、良好
25	-69歳	山の中の造成地	"	---	"	"	9人	祖父	---
26	-71歳	市内まちなか	"	---	"	"	夫婦	夫	---
27	-72歳	---	---	6階建	公団賃貸	フラット(3階居住)	"	"	子供世帯と
G氏	年齢	周囲の環境	自宅写真	階数	所有	住宅形式など	家族人数	左記中の	つきあいを端的に
1	-47歳	商店街のそば	9	2階建	持家	戸建、スーパー経営	5人+従業員	長女	家族との関係がしんどい
2	-54歳	住宅街の中、案外静か	7	2階建	民営借家	アパート(1階居住)	単身	---	勤務先雇用主夫婦と
3	-59歳	向も横もすぐマンション	10	5階建	"	フラット(5階居住)	"	"	勤務先雇用主夫婦と
4	-68歳	駅から歩いてすぐ、便利	10	7階建	"	フラット(6階居住)	"	"	大家夫婦、勤務先雇用主夫婦と
5	-69歳	---	---	6階建	公団賃貸	フラット(6階居住)	"	"	妹夫婦、勤務先雇用主夫婦と
H氏	年齢	周囲の環境	自宅写真	階数	所有	住宅形式など	家族人数	左記中の	つきあいを端的に
1	-5歳	のんびりした住宅街	9	平屋	民営借家	長屋	3人	長女	---
2	-12歳	便利住宅街(北/山、南/瓦)	7	2階建	"	アパート(文化住宅)	"	"	---
3	-35歳	上記近、写真3	8	---	"	戸建	"	"	近隣つきあいない
4	-37歳	現住居近、自然豊	7	2階建	"	アパート	"	"	親戚世帯
5	-38歳	---	---	6階建	公団賃貸	フラット(2階居住)	"	"	近隣つきあいない

つきあいについて言及のあった居住地
写真の数字については図2中の写真の番号を指している

4. 近隣のつきあいと視線によるプライバシーの被害意識の関係

以下では、表2のうちつきあいについて言及された居住地(8名の回答者が居住した75の居住地のうち37カ所)についての発言の中から、表3(5頁)のように近隣のつきあいの有無、近隣のつきあいへの好悪の感情、対面する住戸に住む居住者からの視線によるプライバシーの被害意識の有無など、その被害意識が実際に見られたことによるものか、または、見られたと感じる疑似被害によるものかを発言の中から判断した資料を整理したものを元に、近隣のつきあいと視線によるプライバシーの被害意識との関係に言及する。

4-1. 近隣とのつきあいの希薄化

マンションなどフラット形式の住宅に入居した際に、周囲の既存住宅やマンション内の住戸の居住者とのつきあいが、退職後の高齢者や、「家には寝に帰るだけ」の単身者には生じにくい。高齢もしくは若年で単身の時に近隣のつきあいがないと回答のあったのは、A(3,10)(表2中のA氏の3,10番目の居住地について)、B(10,11)、C(4,5,6)、D(4)、E(5)、F(27)、G(2,3)、H(3,4,5)など15事例にも及ぶ。何らかの理由で転居が重なる場合に地縁に基づく近隣のつきあいが、その人のつきあいの中心ではなくなっている場合や近隣とのつきあいのきっかけのない若い人のいることを示している。高齢の場合はB(10)がその点を指して、『よく、出入りがあったりするねん(転出入が多い)。だから殆ど、隣近所と馴染みになること少なかったね。まあ便宜的にねえ、荷物来たので自然と隣からね、挨拶する程度の関係でね。マンションの方はどうしても孤立するね』と述べている。また、若年で単身の場合は、A(3)のように、高密度市街地での隣地の住宅との距離が近いアパートに居住していながら、つきあいは近所に住む親戚との間だけであると述べ、さらに、『その時はお勤めしてましたから、夜、寝に帰るだけぐらいでしょ。朝はもう遅刻しないようにして行って、夕方帰ってきてね、そんなにね気にはならなかったですね。四六時中あんなところにいたらそりやもうちょっと…、住宅事情もあの頃は終戦直後で悪かったですからね。それはもう息が詰まっただろうと思いますね』としてプライバシーの被害意識も生じていなかったことを示唆した。G氏のように、地縁に基づかない、勤務先での特定のつきあいが、郷里から上阪してからのつきあいの大半であり中心であったことを指摘する場合もあった。

表3 転居地毎の近隣のつきあいの有無と被害意識の有無

被験者	表2中の 居住地の 番号	自宅写真	居住していた 時の年齢 (歳)	つきあいを端的に	近隣のつきあいの 有(○)無(×) ・ふれない(---)	近隣のつきあいへの 好悪(○△×)の感情 ・ふれない(---)	視線によるプライバシーの 被害意識の有(○)無(×) ・ふれない(---)	実被害(○) 疑似被害(×) ・ふれない(---)
A氏	2	1	18-23	同居親戚と	○	×	つきあいの中の詮索によるプライバシー被害意識有	---
	3	7	24-27	近居の親戚と	×	---	×	---
	5	11	30-33	社宅内でのつきあい	○ 社宅内	△	---	---
	6	11	34-39	社宅内でのつきあい	○ 社宅内	△	---	---
	7	3	40-45	近隣と良好な	○	○	×	---
	9	3	48-72	近隣と良好な	○	○	×	---
B氏	10	12	-73	子供世帯と	×	---	×	---
	6	3	31-50	近隣と良好な	○	○	×	---
	10	10	71-74	孤立	×	---	×	---
C氏	11	12	-75	近隣つきあいない	×	×	×	---
	2	4	23-54	社縁=近隣、趣味による縁	○	○	×	---
	3	4	55-61	---	○	○	×	---
	4	10	62-67	近隣つきあいない	×	---	×	---
	5	12	68-72	近隣つきあいない	×	---	×	---
D氏	6	12	-73	近隣つきあいない	×	---	×	---
	1	4	0-27	近隣の過剰干渉	○	×	つきあいの中の詮索によるプライバシー被害意識有	---
	2	---	28-31	近隣つきあいない	○	△	---	---
	4	12	-40	近隣つきあいない	×	---	×	---
E氏	3	11	33-39	隣の住戸と今も続く	○ 隣	○	---	---
	4	11	40-71	隣の住戸と今も続く	○ 隣	○	×	---
	5	12	-72	近隣つきあいない	×	---	×	---
F氏	11	4	27-28	広い1住戸内で社縁	---	---	×	---
	13	11	31-34	社宅内でのつきあい	○ 社宅内	△	プライバシー被害意識有 社宅つきあいの詮索によるプライバシー被害意識有	---
	17	11	39-	社宅内でのつきあい	○ 社宅内	△	---	---
	18	---	-40	近隣つきあいない	×	---	×	---
	22	---	44-49	近隣つきあいない	×	---	×	---
	23	---	わずか	社宅内でのつきあい	○ 社宅内	△	社宅つきあいの詮索によるプライバシー被害意識有	---
	24	11	50-61	近隣+歴史サークル、良好	○	○	---	---
	27	12	-72	子供世帯と	×	---	×	---
	1	9	0-47	家族との関係がしんどい	---	---	---	---
	2	7	48-54	勤務先雇用主夫婦と	×	---	---	---
G氏	3	10	55-59	勤務先雇用主夫婦と	×	---	---	---
	4	10	60-68	大家夫婦、勤務先雇用主夫婦と	○	○	×	---
	5	12	-69	妹夫婦、勤務先雇用主夫婦、隣住戸	○	○	×	---
	3	8	13-35	近隣つきあいない	×	---	×	---
	4	7	36-37	親戚世帯	×	---	---	---
H氏	5	12	-38	近隣つきあいない	×	---	×	---

写真の番号は図2参照

*1: 2件としてカウント *2: ○としてカウント

4-2. 視線によるプライバシーの被害意識の生来的な希薄さ

そもそもプライバシーの被害意識など性格的にも生じないと語る回答者もいる。A氏、B氏、C氏などであり、この3名は「アンケート」でも、居住開始から1,3,6ヶ月時のいずれの時期にも被害意識があるとの回答を示しておらず、また、居住履歴の中でも、対面する住戸の窓から見られることを「気にする」ようなことはなかったと述べていた。A (10):「私は大体あんまり人のことが気にならない、一人でもちょっとも寂しくないんですよ。やりたいことが一杯あるもんだから。一生懸命やって、本当あんまり気にならないし。今のところ気にならないので幸せな。人が外を通るのを見るのがまた楽しいんですよ。人と話す機会が無くてもね、下を若い子が走ったりね、子供が遊んだりしてるのを見るのも楽しいからやっぱり窓は大きい方が良いですね」やC (4, 5, 6):「それはね、やっぱり着替えしようかというときにはね、(カーテンを)閉めますね。だけどずっと閉めるというようなことはこれまでにそういう経験はないですね。視線感じてこっちのぞいておられるというような、こっちからは見えなだけでみないなことは、私自身は感じたことはないですね。(マンションに初めて移ったときも)別に違和感なかったです」と語っている。G氏は、「アンケート」では、現在、居住している住宅では「感じる・気になる (1ヶ月時)」「感じる・気にならない (3ヶ月時)」「感じない・気にならない (6ヶ月時)」と徐々に被害意識が薄れていっており、次のコメントをして

いる。G (5):「明るい方が良からばって開けていて、見られてもかまわへん。どちらかって言うと。…そう、暗いのが嫌いだったから。着替以外だったらね、まず開けます。それから陽が差さなかったら開けてきます。陽が差しこむと…畳の色が変わったり…借物なのね。自分のもんならいいんだけど、人のものだからと思ってね」と窓の外からの視線を気にしないことを語っていたが、「視線が気にならない」までの期間を要したことが、「アンケート」の回答からも判断できる。また、E氏は、E (4):「ここ (E (4)) ではね、1号棟と2号棟3号棟ずっと並んでる (平行配置住棟の) 真中やから (2号棟に住んでいた) ね。そういう視線でいえば両方からね。よくしたもので、夏は、葉っぱが茂るでしょ? だから緑のカーテンで見えないんですよ、お互い窓は。で、冬は (葉が) 落ちちゃうけども障子があったんですよ。で障子があるし冬は開けっ広げないんで、ちょうど、スクリーンが上手いことあって、そんなにプライバシーが侵されるとかいうような気遣いなかった。…結構ねえ、(住棟間の) 空間が広がったんですよ。カーテンしてる家もあったけど、私とかは割とそんなの気になんないから。じっと (向かいの住棟から) 見てるわけないから、いいよとか言って」と、住棟間の緑が視線を遮る役割を果たしていることを自覚的に認識していた。

4-3. 近隣のつきあいと視線によるプライバシーの被害意識の関係

表3から、近隣とのつきあいの有無と視線によるプライバシーの被害意識の有無を整理して、第1章に示した命題①、②、③のいずれにあたるか、その件数を表4にまとめた。

- ①「近隣のつきあいがある場合…プライバシーの被害意識が生じない」
 ②「近隣のつきあいが無い場合…プライバシーの被害意識が生じる」
 ③「近隣のつきあいが無い場合…プライバシーの被害意識が生じない」

表4 近隣のつきあいと被害意識の発生の関係

本文中の 命題番号	近隣のつきあいの 有無	視線によるプライバシーの 被害意識の有無	総数(件)*
①	有	有	0
②	有	無	8
③	無	有	2
③	無	無	13

*: 表3の件数をカウント

表4から、被害意識の生じるのは、数少ない事例であるが、近隣のつきあいが無いときに生じやすいことがわかる。しかし、近隣とのつきあいが無い場合でも被害意識が生じていない場合の方が、件数も多く、②よりも③の方が、視線によるプライバシーの被害意識と近隣のつきあいの一般的な関係を表していると言える。

これを居住していた住宅の種類ごとにまとめたのが表5である。居住していた住宅と居住していた年齢や世帯の構成などを併せて考えると、①のうちの多くは、子供が世帯にいる間の戸建住宅地であることを指している。また、③は、郊外の平行配置住棟の集合住宅が大半を占める。これは高齢になったときの住宅が多く、高齢になったため周囲の住宅とのつきあいが生じていない場合を示している。また、2件であるが、高密度市街地での住宅も入っている。これは若い年齢の時で周囲とのつきあいが生じていない場合を示している。

表5 各命題毎の居住していた住宅の内訳

本文中の 命題番号	居住していた住宅	図2の写真番号	件数*
①	戸建住宅地	写真3, 4	5
	郊外の平行配置 住棟の集合住宅	写真11, 12	2
	周囲の戸建住宅の中に 1棟だけの集合住宅	写真10	1
②	郊外の平行配置 住棟の集合住宅	写真12	2
③	郊外の平行配置 住棟の集合住宅	写真10, 12、 高層集合住宅団地	10
	周囲の戸建住宅の中に 1棟だけの集合住宅	写真10	1
	高密度市街地の住宅	写真7, 8	2

*: 表3の件数をカウント

4-4. 視線によるプライバシーの被害意識が生じている場合

前節までのように、若年の単身者のように地縁でのつきあいの生じない場合など、窓の対面する家が必ずしもつきあいのある近所にはならないため、カーテンなどの遮蔽物を用いても遮蔽による安堵感を得られないことがあり、視線によるプライバシーの被害意識の生じることが全体の中での事例としては少ないが、生じることのあることがわかった。本論の回答者の全体の中でも、少数事例であるが、これを詳しく見る。

H氏は、現在居住している住宅について、H(5):「最初は、我が家が(対面する住棟から)どのように見えるのか、どれくらい見えてんのやろっていうのがね、こっち(家の中)から見えるのと、明るの中から暗い外を見るのと、わかれへんから、一応(向かいの住棟の共用廊下へ)私も上がってね、見たんですよ。ほな殆ど何にも見えへん、ということがわかったから、もう、別に開けてても(気にならない)。ただこのガラスは(視線が)素通しやから、

そのレースのカーテンまではちょっと、ねえ。開けるのはやっぱり嫌なやつというの、ありますね。ま、向こうからそう、常に観察してる人いないやろうという前提で、少し人影が見えるぐらいやったら、気にはならないという程度ですね」と対面する住棟の廊下から自住戸の見え方を確認してみるなどして安心を得ていることと語る。しかし、「アンケート」ではいずれの時期でも近くの家・住戸からの視線を「感じる」し、「気になる」として被害意識があると回答していた。「誰が見ているか」ということに対して、実際に見られたことがあるわけではないが、この、「なんとなく」生じてしまう被害意識が、居住者の訴える「視線によるプライバシーの被害意識」の中で、ある割合を占めるのではないかと考えられる。高齢となっても女性の場合にはこの傾向が強く、C(5):「家内はそういうこと気にしましたから、見られるからと言って。いろいろ(住棟の窓の)向きが違って方々に(不規則に)ありますから、窓開けたら向かいの人と顔会わしたりというケースは結構ありましたが。向かいの住棟とはここ(現在の住宅であるC(6))と同じくらい(30m弱くらい)離れていましたけどね。同じ階とか、ちょっと上の階とか、だと窓開けて手振ると、挨拶できるくらい。僕なんかはあまり気にしない方だけど、下着替えたりなんかはね(気になるけどそれ以外は気にならない)」と述べていた。

「アンケート」の自由記入の中から、被害意識について記述のあった、I氏、J氏(インタビューの回答者とは別の人)にも触れる。

I氏:「ベランダの向かいに喫茶店と銀行の文化教室みたいなものがあり部屋の高さが全く同じなのですごく気になります。洗濯物を干すとき以外は外に出ることがない。部屋の中にいて台所で洗いをしても視線を感じる。喫茶店に行ってこちら側を見ると部屋の中までよく見えたのでそれから家族中すごく神経質になっている」やJ氏:「ベランダから見える棟との距離が思ったより近くに感じる。部屋の中が丸見えになるのでカーテンを開けることに抵抗を感じる。物音に敏感になった」など実際に自ら何らかの確認をH(5):前述のようにおこなった場合には、その結果に基づき被害意識がそのまま固定されることがあるようである。

4-5. 戸外環境を確認して被害意識がなくなる場合

窓から見える戸外環境を確認して、被害意識がなくなる場合がある。近隣とのつきあいが希薄になることを望んでいるD氏の場合には、転居に際して入居するマンションなどでの居住階を選ぶときにも、D(3, 4):「それを選んでわざと一番上を選んだんです。…だからもう真中は絶対嫌だと思って、まあ一番下も嫌なんですけど、出来れば高いところで。だから(閉めるカーテンは)レースだけですよね。でまあ、寝るときはそれだけっていう事で。出て行く時はこの状態で(カーテンを開けずに)出て行きます」と述べ、「アンケート」でも被害意識はない。つきあいが無い場合でも、周囲の建物とどのように窓が対面しているかについての認識があれば、H(3):「南北で言うと、南はもう、屋根瓦しか見えなかったんですよ。北はかわは…もうあの、住み初めから住み終わりが長いので…その間に、あの色々、家が建ってたりなんなりしてたんですけど、かなり長い間山がずっと見えてましたね。私の商売は…夜中も働いし…家へは帰って寝るだけ…えっと、私が住み初めた頃は周りの家は全部平家で、三方、ばーっと見渡せるんですよ、我が家の、2階からはね。開けてても、さしてどこからも見えないという状況。で、ガラスが全部すりガラスやったんで、ガラスを開めれば、レースのカーテンを開めなくても別にブラインド効果は、あると。だから全然周りの視線というのは気にならなかったですね。ただ、年月が経つにつれて裏の家が2階建にしたり何なりした時にはもう、レースのカーテンを開けてしまいましたけどね」と、周囲の住宅の更新につれ、そもそも視線を感じなかった(感じるはずがなかった)状態から状態から徐々にカーテンの遮蔽の状態を替えていったことを語る者もいた。

5. まとめ

本論では、回答者となった8名が、現在居住している住宅に転居してくるまでの居住地での経験をインタビューによって確認することによって、

- ①「近隣のつきあいがある場合…プライバシーの被害意識が生じない」
 - ②「近隣のつきあいが無い場合…プライバシーの被害意識が生じる」
 - ③「近隣のつきあいが無い場合…プライバシーの被害意識が生じない」
- のうち、②、③の妥当性を、以下のように確めた。

被害意識の生じるのは、数少ない事例であるが、近隣のつきあいが無いときに生じていることがわかった。しかし、近隣とのつきあいが無い場合でも被害意識が生じていない場合の方が、件数も多く、②よりも③の方が、視線によるプライバシーの被害意識と近隣のつきあいの一般的な関係を表していると言える。

居住していた住宅では、②は郊外の平行配置住棟の集合住宅に居住している若年の単身世帯、もしくは高齢者の夫婦のみの世帯で近隣とのつきあいが生じていない場合であった。また、①は、子供が世帯にいたときの郊外の戸建住宅地を住んでいるときであることが多く、③は、高齢の世帯で、郊外の平行配置住棟の集合住宅に住んでいるときであることが多いことがわかった。

また、②の被害意識は、その発言などから、実際に見られたことを指しているのではなく、窓が対面していることによって生じる圧迫感を指していると考えられる。このような心理的な圧迫感が働く場合には、行動的な人では、対面する住棟の廊下などから自住戸の窓の方を実際に見てみるなどして、自住戸の室内が見えるのかどうかなどの確認をおこなったりするが、各々の発言や「アンケート」の自由記入などから、この圧迫感が十分に解消しない場合に被害意識が発生していると考えられる。視線によるプライバシーの被害意識にはこのように、近隣でのつきあいがなく、「見られる」という事実に基づかない被害意識が含まれていると考えられる。実際に見られているかどうかよりも、「見られるかもしれない」ことを心配するという被害意識があることに留意する必要がある。

また、居住履歴の中で、高密度市街地と考えられる場所で居住したことのある回答者（G氏、H氏）や、転居回数の多い回答者（F氏）も、現在の住宅での視線によるプライバシーの被害意識は、「アンケート」を見ると、入居から1,3,6ヶ月時のいずれかの時期に被害意識があるとの回答を示している。高密度市街地での居住経験や転居回数の多いことが、転居した先での居住環境へ、抵抗なしに移行していくわけではないことを示していると考えられる。

これらは、少数ではあるが、各回答者に対する長時間にわたるインタビューによる応答によって初めて得られる成果であると考ええる。本論の調査は数少ない回答者から得られた知見であるため、多くの居住者に通じる一般性を十分に示したことにはならないが、視線によるプライバシーの被害意識の解釈に新たな視点が必要となる可能性を十分に指摘、示唆するものと考ええる。

* 調査に際し多大な協力を得た都市基盤整備公団関西支社の塚本幸三氏、増田直隆氏、井上廣光氏、インタビューに協力下さった居住者各位に厚くお礼を申し上げます。

* 本論は前田記念工学振興財団平成11年度研究助成によった。

注

- 1) 原文は、「近隣交際が…活発になれば…、共有領域化が進み、知らない人に対する排他性を強め、グループの防犯性を向上させる…安心感の形成は生活を開放的にし…その結果近隣交際や行動のひろがりを促進する」(p.110)
- 2) 都市基盤整備公団の奈良学園前団地（建替／賃貸／6階建）。郊外の私鉄駅から徒歩3分で周囲は商店や比較的大きな戸建住宅が建ち並ぶ。外廊下に面して窓があるので、中庭をはさんで、住棟間に窓の対面があり、また、周囲の住戸との間には低層部で、また、敷地西側に面する小規模な商業ビルとの間には5階部分まで窓の対面がある。この団地のC、D棟（1998年8月入居開始）を対象とした留置自記式のアンケート（入居開始から1,3,6ヶ月時の3次に亘って実施。3期続けては112名の回答）時にインタビュー調査の主旨を説明し、協力の得られた8世帯に対して1999年3～4月に実施。

参考文献

- 1) 小林秀樹、鈴木成文、
「集合住宅における共有領域に関する研究—その1. 共有領域の構造」、
日本建築学会論文報告集、第307号、pp.102-111、1981.9
- 2) 小林秀樹、「住居集合における共有領域の形成に関する研究」
東京大学学位論文、1984
- 3) 宮代豪、乾正雄、「住宅の居間における窓格子の心理的効果に関する研究」、
日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）、pp.61-62、1982.10
- 4) 友田博通、「住居集合計画手法に関する領域的考察—住居集合における開放性に関する環境心理的原理」、
東京大学学位論文、1986.9
- 5) 保坂陽一郎、「空間の演出—窓—デザインボキャブラリーとしての展開」、
彰國社、p.11、1984.8
- 6) 吉田 哲、宗本順三、
「窓の対面環境による視線の感受意識とプライバシーの被害意識の相違—木質アパート建替集合住宅を事例として」、
日本建築学会計画系論文集、第529号、pp.125-131、2000.3
- 7) 宮代豪、乾正雄、竹内義雄、
「居住空間における視覚的プライバシーに関する研究」、
日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）、pp.355-356、1984.10

(2000年2月17日原稿受理、2000年11月30日採用決定)